



おのゝ久良物利
神







鶇

のさきわ庄屋の鶇は涙り初雪淀
鶇や、しるしわさき上君山
かきつゝるをく鶇もや雲は帯
くさくさやもあ鶇好く明鶇
鶇や雲乃低く小水は上潮月



全

鶇の鶇の下社氣

鶺鴒の橋や魚のくさくさの中葛の
うらまをわはしうらまを琴の友高平
あまのこは有る母のこは橋の可來
鶺鴒や琴の橋の東葉

全

あまのこは橋のくさくさの中
かきかきやうらまのこ今戸橋吉門

哥仙

鶺鴒や魚のくさくさの中

扇裡

鶺鴒の志みくさくさの中梅郊

鶺鴒の船の橋のくさくさの中雪淀

かきかきやうらまのこ今戸橋

鶺鴒の志みくさくさの中梅郊

鶺鴒の志みくさくさの中梅郊

鶺鴒の志みくさくさの中梅郊

みづの浅焚大釜の下扇裡
翫ふもすけいゆりや桐の葉
甘棠

光とまき牛ふまき人五月雨扇裡

古塚ふ唱ふ唱へて村神 今

按摩の言のなる山彦 馬林

あふ藤ふ節のよりまふ池の波 今

舟の枝折ふ傷に傘 其棠

関西の国に東の道と 吟 今

是を見ふ結ふ服と解く酒 馬林

むしきりぬ鷹健の丁付を筏 今

夏あふ續く長う漆壺 扇裡

猿の聲を既てやけと聞け 今

結珠の所も糸不織函所 其棠

阿の浪や六つと六つとふく 扇裡 今

折ふふ骨を折る雷 馬林

うき事乃敷ふとめまはし紙 今

能く笑わぬお母の柳尻扇裡

一個ひとこおききううお鶴おきき今

常帯控行縁目お東井棠

かろく之種はのまきほ蝶の舞今

蜀赤お思ふるるりき一馬林

さすまこのいほも細ふ棒け今

碓も打つるるるる園守扇裡

おのく紫の燈おるほむしお紫今

おきうは聲の浅お姑蘇城井棠

おきうおら切ねおか帆おいけと馬林

もさうおきうハ馬お踏蝦明

兼おらく馬帽おの中のお紫今

柳お鞠おゆりお交里扇裡

女郎花

迷ひ子の泣く泣くお乾おほく蝦明

こぼるるお涙おかきや女おお梅郊

仰向ぬるさめりおみ下 鳥林
又言はれぬおぬれ人めり兼百葉

今

最上はぬるさめりおめり不陶巾
毛流記念の家おぬれおぬれ下 了因
おぬれ下 折おぬれおぬれおぬれ 高平
おぬれ下 折おぬれおぬれおぬれ 義鳥
おぬれ下 折おぬれおぬれおぬれ 丁々

今

おぬれ下 兼おぬれ二八乃おぬれ 有佐
小一合おぬれおぬれ下 女おぬれ 湖十

今

おぬれ下 兼おぬれ 扇裡

おぬれ下 兼おぬれ

おぬれ下 兼おぬれ



鴈

丁乃みり本溪流りのかさし藤 蝦明
 ちの丁のそ目はまに 籟雲 梅郊
 風も毎細に入口や丁のそ 鳥林
 初アやなまりに 庭をたれつる 百葉

今

折れアがまねく草乃 楊柳 陶巾
 丁わくは南の果や 海苔 了 因

梅乃圃ふ雪舞くて折る丁もろ高平
竹の起るびく北のや丁の聲義鳥
丁のやあゝあゝの聲を響く丁

全

初丁や雪舞くてらん其畠有佐
その屋や細く風のききり比湖十

全

その山にやまきこむ房の扇裡

田のきこむまの

萩

嗚やこゝ萩まゝ萩乃水はる雪淀
白らけも白らけらんや庭の萩君山
雪人乃こゝるやみかね萩唄水
雪のけ袖と岳もやみねのふ其棠
うらゝ萩不凍り林のこ潮月

全

ふの六葉萩りりらん萩の森社氣

系林の垣と隣りて 蔓うふ 葛物
音々ぬち 萩の常なり 浪の音 素十
何人の行へ 浪の音 萩の音 万來
むね 佐野とて 萩の音 東花

全

とて ぬきふ 萩の音 萩の音 萩の音 萩の音
楮の音 萩の音 萩の音 萩の音 吉門

全

葉の音

扇裡

葉の音

葉の音

葉の音



鶏

知りては鶏鳴之鶴桑乃湯雪淀
 深艸やうつ衣の古子市君山
 野うほも胡のの弦鶏蝦水
 己う解小たのう効志鶏下南其棠
 五のりせごらも啼りう籠鶏潮月

今

是れらら都人れきううつが社鼠

月と夜と鳥と深く 鶴のふ 葛の
清く静かに 深き名鶴の 素十
飯しく片山里のうつくし 万來
鶴の習性うつくしや 枕とや 東義

全

稗を蹴り行儀の引鶴は 采仲

うつくし 師吉門

全

水とつ連る中ふ 扇裡

水はく 鶴のふ

薄

引舟や尾をの浪の首つきら 蝦明
山風のそよび風をの尾ふ 梅郊
風いづの塘(ま)の尾ふ 鳥林
一舟の風のそよびふす 百葉

全

足利家物はさるる藤系陶中
野もあつた藤の 船頭了因
田もあつた細もねは藤系 高平
持統の左右分らぬ藤系 那義鳥
行人もあつた藤系 丁

今

耳もあつた藤系 那義鳥
里の子の藤系 那義鳥 湖十

今

結

扇裡

そ乃刀あは

藤系

秋

水邊物行はくもくも原存義
藤ふたどと秋ふくもん平砂
石月やあまの御と通稿 祇丞
夕月おのふくや蟬の声 宣明
湯女うす秋ふくもくも原の楼川
石月やあまの御の火の聲 渭北

幽居

庭に落門と下部の掃ぬ人 旨原
初アやんまてくもくも原 紀逸
西仇んよやう火桶の掛るは 再賀
菊あまのくもくも原 珠来
初草や楮の蔭あまの床に又 万立
石月やてま窓の秋の草 頭 超雪
宵不眠のあまのくもくも原 秀億
何事う洞や芝の生善市 嘉延

かきくはわがまゝ人乃悟む鳥 栖鶴
 地少あゝふふあふふ人天の川 書永
 草やあふふ命とくこし麻の声 鶏口
 むくまはぬ葉とほと根實ふ 柳尾
 名とくやあふふふふふふのやと 庭其室
 初了やまぬれ灯もまゝは付 由林
 竹何しはる蹄や燐るる 清泉
 初了やまぬれ灯もまゝは付 田社

大

右四節題

平砂書

五



鶴

炭火伝山鳥子不春有花病の番 蝦明
 昔田鶴の隠れ家持ぬ霜聚 梅郊
 杉屋子鳥の眠り也 鳥林
 離鳥り日向小遊小やまうふ 百葉

今

吾作もろく豫念山也 神の苗也 陶巾
 更く遠く一田中持ぬまきよみ時雨介 了因

鶴乃傳と推し置るるをう形 高平
十月和いそぬ田鶴の捨公喰 義鳥
因西の病中と似ぬやまふ丁

全
十月廿十は物縁に極病有佐
言田鶴の膳々々を於時雨外 湖十

全
臨海所あり朝日 扇裡

長考乃意以傾挿

殘菊

菊之残るるは遠きや神守自 雪淀
名もあつたふれきや神の苗も 君山
子乃戸や地お客をへ結ぬ菊 銀水
くまぬまのこころを日也焼く菊 甘棠
初まねやうつはふ葉ふ風葉外 御月

全
十月廿日向ふ遠きやを氣社氣

申じし神のまゝに成り残り菊葛粉
ふりかへし雨と菊の鶴ふ素十
菊は建礼にけり合ふ小まふ菊
ふりかへし成り成り成り成り

今

ふりかへし成り成り成り成り
成り成り成り成り成り成り

今

西山

扇裡

~~~~~  
~~~~~

~~~~~



千鳥

打鼓聲家火と平けし小松子鳥 雪淀  
 とけし聲己とけし如くし 御 君山  
 破千鳥起しとけし如くし 御 水  
 舟とけし如くしとけし如くし 御 棠  
 河井とけし湯とけし如くし 御 鳥 潮月

全

寧科燒白心乃事如くし 御 社鼠

多きしは二生きぬ子多可南葛杓  
弓か陸奥より川津と御外素十  
埋火乃消く言はれ小想もる 万来  
掛舟着り上りちとら小 東花

今

十分の星の葉や川子鳥 采仲  
物買ふかしの書りたちとら 吉川

今

塩子孤りるる孫はや 扇裡

浦子お運

枇杷

卯圍とふね了枇杷の葉外 蝦明  
陸種のみや折る身 枇杷乃ふ 梅郊  
常るかくれ星ありむとけ森 烏林  
虎色乃むるもさる人お那 百葉

今

雨空無雲不流ねて晴しむる也 陶巾  
よあきあきいひあきあきね 枇杷のふ了因  
おれはあき包そむむと乃るあき 高平  
あき後の法なく一子一むと乃る 義鳥  
あきあきあきあきあきあきあき 丁々

今

霜乃色とゆくとく之 枇杷の葉 有佐  
日けの影よりあきあきあきあき 湖十

今

辨きより

扇裡

あきあきあきあき

枇杷乃

あき



五十二葉

月村所米仲画

水鳥

溪澗の中へさしぬる鴨の聲 蝦明  
 泣野や泡り追はるる湯 梅郊  
 今月やぬるさな家鴨の聲 鳥林  
 多門如る水は濁りや 二所 百葉

全

あまのり一口嚙やうす水 陶中  
 春ふくふ今あまもも月家了因

松竹川流巻く松竹や一帳を舟高平  
是野のそらぬやや流流 義鳥  
わね踏や松竹いよに記踏戸丁々

全

水鳥年暮く新湯と堤ふ那有佐  
聖也たわたり次すおたり 湖十

全

百まぬまほしき〜 聖の 扇裡

ぬ〜 扇うか

雪梅

一輪を是も長者気高は梅 雪淀  
まき〜 高小菊い〜 小梅小 君山  
子咲ふ高は高を向ふ 胡外 賑水  
はりの咲け〜 雪を包む 花梅は 其棠  
探幽も同のす〜 高梅 潮月

全

秋の先〜 雪梅 社鼠

多や咲の梅も母は乃小雪ふ葛物  
逢ふ毒拂ひわきふ深き糸十  
子梅や多折くむらひる糸万来  
縁作や片不梅乃書掃ん東卷

今

毒乃叩き言ふ部書の書の後采仲  
子梅と母乃人々を雪行淋吉門

今

中毎

扇裡

雪

年



冬

鞭控子子其母もまゝに懐存義  
白ひまをまゝ晒りりみその梅平砂  
津から八圍ふりりもく樹外祇丞  
人るね拍子ぬけりみ親買明  
枯草うり雪のまじりや雪は梅橋川  
まの雪はまのみの雨を枯れり渭北  
江凡ふれに赤記ふりりか紀途

折坤ハ羽浮斗り千鳥外再賀  
まの雪は錦やまやう松乃青珠来  
雪加珠一日は貴折は龍の松万立  
月も雪もまらも雪は津外超雪  
まの雪は氷乃雪は小松も秀億  
初雪は初雪の定りぬらう嘉延  
初雪は初雪の定りぬらう栖瀨  
初雪は初雪の定りぬらう書永

未摘の鼻紙敷きや今約の雪雉口  
まゝもやと今食の果不蒸かぬり 柳尾  
岩窟のそれも室の山踏了る 庭臺  
以景の草一こ晴や夜も多 由林  
龍舟の心をたつた浦高外 清泉  
此等おた部の伝所もむか 田社

四節

坊の草のぬりもさる梅は集 春來

小坊のぬり対る暖簾や更衣今  
海と今も浪波ふたむし母身余、  
初雪やも獨ふとぬりた新、

奇仙

はらわたり初りねるは

あつたしつたぬりたあや

事つたぬりたあや

如白やま紫の舞も帰る候扇裡  
少まもつあや草毒湖十  
香小白ふ鞠の板と組まきく有佐  
場介大と焚くや紅青珠来  
關れろくくは(再)入ふり渭北  
體の言中事終りい煉万立  
芋飯れ同くはらうと趣合て超雪  
あつち中にも法に頼む秀億

娘くは一言下意のかりん嘉延  
子代もくは新秋菊并桐霍  
折了物もほい麻も福も神書永  
まむし物くめんは鞋も初雞口  
朝もくは夜もあも梅も月紀逸  
まのりもれのもまはく魚柳尾  
又もくは中の地も乃別種庭臺  
望し紅面も程言れ上由林

ひさしくみおのぼりたるとくなく 清泉

北の山に庭に掛る玉川 田社

古の藤がほろもてかたし柳 吉門

向の橋をみよふ年の縁 米仲

高札らゆみ形もも一万度 再賀

まはりの橋をみよふ年の縁 渭北

葉州禪をみよふ年の縁 万立

流石にみよふ年の縁 太刀持扇裡

猫をみよふ年の縁 秀億

何粥草をみよふ年の縁 再賀

すゝ草をみよふ年の縁 由林

さるをみよふ年の縁 有佐

はなをみよふ年の縁 雞口

まゝ袍をみよふ年の縁 嘉延

海をみよふ年の縁 湖汁

食をみよふ年の縁 書永

十月の佛事にもあつた里田社  
事の本居は紀伊年紀逸  
山より舞下満るるまの幕掛く采仲  
杉の枝もさう陰分代和吉門

寶曆三癸酉初冬

跋

とまゝに下出さるるの曆とこれ  
堂志百百葉とさるるよと地  
来へるふ  
扇君十二花巻乃玉詠あま  
自村所ら此みらるる  
連司めらるる様もの

十  
葉

白鳥とて 僕も海とて 時  
久は中とて や 軍とて 久は中とて  
雲とて 鶴とて 鶴とて 鶴とて  
光とて 鶴とて 鶴とて 鶴とて  
色月昇 鶴とて 鶴とて  
珠とて 鶴とて 鶴とて 鶴とて  
曲とて 鶴とて 鶴とて 鶴とて

物連 鶴とて 鶴とて 鶴とて  
候介 鶴とて 鶴とて 鶴とて  
久とて 鶴とて 鶴とて 鶴とて  
風急 鶴とて 鶴とて 鶴とて

酒海

湖中



彫工 吉田魚川



بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

